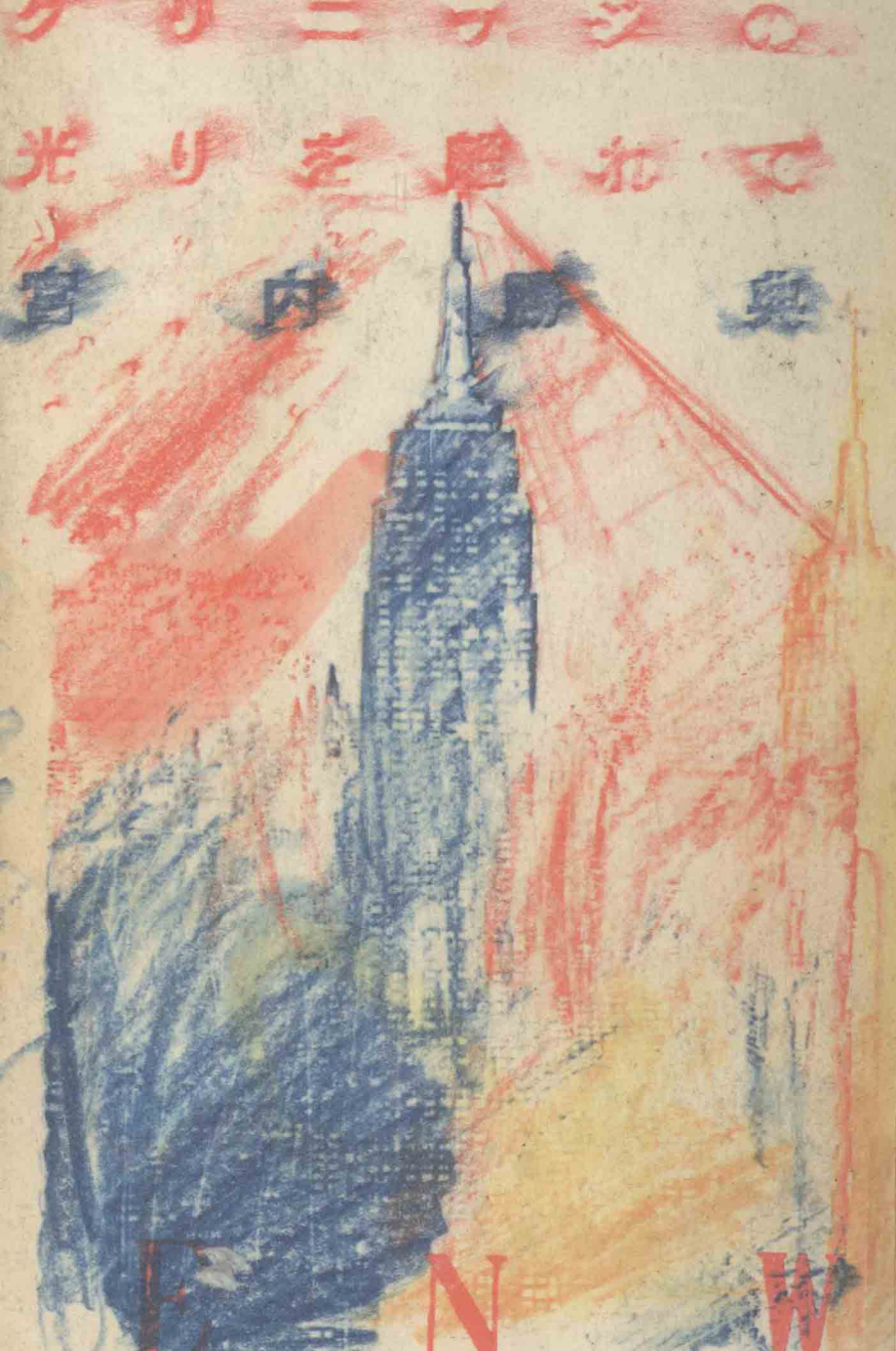




グリニッジの光^{ひか}りを離^{はな}れて © 1980

一九八〇年八月二五日 初版発行
一九八〇年二月一五日 三版発行

著者 宮内勝典

装幀者 横尾忠則

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
電話 営業 〇〇三―四〇四―一二〇―
編集 〇三―四〇四―八六一―
振替口座(東京) 〇―〇八〇二

印刷 暁印刷
製本 小高製本

落丁・乱丁本はお取替えいたします

宮内勝典(みやうち・かつすけ)

一九四四年ハルビン生まれ

鹿児島県立甲南高校卒

一九七九年『南風』で文藝賞を受賞

現住所 東京都板橋区高島平

三―一―二―一〇三

著書 『南風』(河出書房新社)

グ
リ
ニ
ッ
ジ
の
光
り
を
離
れ
て

青空は遙か高みへ押しあげられて、葉も枝もない垂直なコンクリートの森の底へ、光りが降りそそいでいる。熱のない透きとおった秋の光りだった。

風に運ばれてゆく雲が、高層ビル群のガラス窓に映り、さらに四方八方へ乱反射し、中空でいつせいに燦めいている。それにしても、この青空はなんと深さだらう。きつと海が近いせいだな、砂漠と地つづきのカリフォルニアはこうじゃなかった。あの空には、碧い鉱物の結晶をおもわせる硬さがあるが、この青は、有機的な水の深さをはらんでいる。谷底の通りを歩いていく人々も、それぞれ孤独を抱えこむように背中をまるめ、うつむき、黙っている。

この街は好きになりそうだった。

マンハッタンの真中、ペンシルヴェニア駅から私は歩きだした。一九六八年、十月、そろそ

る秋が終りそうだった。冬のニューヨークは想像を絶する寒さだというから、一日も早く生活の足場を固め、冬を越す準備をはじめなければならなかった。

とりあえず、グリニッジ・ヴィレッジへ行ってみようか。安ホテルもあるだろうし、昔、ピート族にかぶれて鎌倉の円覚寺にこもり禪の真似事をしたり、ヒッチハイクで日本中を放浪した十八の頃、そこは憧れの地であった。グリニッジ・ヴィレッジか……。まあ、いいじゃないか、行ってみようと、私は苦笑まじりに思った。

五番街を、まっすぐ南へ降りていった。

華やかなショーウィンドーに、膝のぬけたジーンズを穿き、髪が縮れ、三年近くカリフォルニアで肉体労働をしていたため真黒に日焼けした自分が映っている。よく出稼ぎのメキシコ人や、プエルト・リコ移民、フィリッピン人、東南アジア人、たまにはアメリカ・インディアンに間違われたりするのだが、なるほど、このひどい焼けようでは無理もない。蒙古系の黄色い皮膚は、すっかり下着の裏に隠れている……。

十四番通りと交差するあたりから、古びた煉瓦造りの建物が目だちはじめた。錆びついた非常階段がひしめく路地に、失業者らしい男たちがたむろして、ポリバケツの野菜屑や、新聞紙が散らばっている。黒人の子供らが、自分の頭の倍もありそうなバスケット・ボールを自在に操り、追いかけていく。

場末の安ホテルに宿をとった。宿帳には、でたらめの名前を書いた。昔は覚えていたらしい

十九世紀風のホテルだが、壁の漆喰が剥げ、窓の鉄枠はぼろぼろに腐蝕していた。共同使用のシャワー室にはホモの連中がうろつき、わざとらしく刺青のある裸体をひけらかしている。筋骨たくましいレスラーのような体格なのに、漫画のワッペンをべたべた貼りつけたみたいな刺青の絵柄があまりにも幼稚で、私は吹きだしたくなるのをこらえていた。

廊下に椅子を出して、ドアの隣りに坐っている女がいた。尻の左右が椅子からはみ出すほど肥り、軟かく白い肉塊がぐにぐにやに盛りあがって、彫刻家が仕事にとりかかる前に粘土を練りあげ、台の上に据えたばかりの塊りをおもわせた。

「ね、ちょっと来て」女は手招きした。

ドアの脇に、松葉杖が立てかけてあった。

歩いていくと、もっと、もっと近くに、と女は坐ったまま手招きして、いきなり私の腰に抱きついた。

「ねえ、あたしを知りたくない？」

娼婦たちの常套語だった。イタリア系らしい黒い髪がむっと臭った。困惑していると、女は私の股間に頬ずりして、ジーンズの上から軽く歯をたてた。松葉杖の握りの部分が、手垢で黒光りしている。

「いま金もつてないんだ、ほら、シャワーを浴びてきたとこなんだよ」

湿ったバスタオルを見せると、女はだらんと腕をおろした。病気の山羊か牛のように眼がう

つろで、瞳孔から悲しい視線がのびてくる。

夜になると、エレベーターの中に娼婦たちがたむろして、一階から最上階まで昇っては降り、また昇っていく。化粧した男娼もいる。アパート代りにこの安ホテルに定住しているらしい男たちは、すっかりくつろいで娼婦たちと世間話をしていた。新顔の客がエレベーターに乗り込むと、娼婦たちは喉を鳴らし、四方からすり寄ってくる。私は財布を盗まれないようポケットを抑えながら、

「アパート捜してるんだけど、どの辺が安いんだい？」と尋ねたりした。

どこに住むか決めるため、地図を手にしてマンハッタンを歩き回ることにした。部屋代が安く、さまざまな人種が雑然と入り乱れている場所、自分をもっとも目立たず、群集のなかにすっと紛れ込んでしまえる場所をさがす必要があった。移民の多いスラム街がふさわしいが、イタリア人街とか、チャイナ・タウン、黒人街、ユダヤ人街といったふうに、ある特定の民族・種族が集中している地区は不都合だった。まず近辺のグリニッジ・ヴィレッジを歩き回ってみた。白人や黒人をはじめ、多民族がごちゃごちゃに住んでいるのは気に入ったが、芸術家気どりの連中が多く、すっかり観光地化して、生活の匂いが稀薄だった。レストランも部屋代も高かった。空腹を満たすための安食堂があり、人々が足を地につけて暮している街、そんなところを捜さねばならない……。

グリニッジ・ヴィレッジの南側、ソーホー地区を歩いてみることにした。古びた煉瓦造りの建物が多く、戸もガラス窓も壊れた廃屋を風が吹きぬけていた。野良猫がその階段を駆けのぼり、暗い窓から隣りの煉瓦壁へひらりと跳び移っていく。エプロン姿の黒人のおばさんが、非常階段に洗濯物を干している。雑貨屋から、バナナの房を手にした子供が飛び出し、主人らしい男が「こらあー」と大声をあげて追いかけていく。そうだ、この街は本当に好きになりそうだ。三年近く暮したロサンジェルスは、だだっ広く、がらんとして、なにもかも無機的で妙につるりとしていた。週に一度、巨大なスーパー・マーケットへいくだけで、雑貨屋も、八百屋も、肉屋もなかった。煙草を買うのにも車に乗らなければならなかった。生活に実感や興行がなく、初めはそうした没個性を面白がっていたが、一年もすると耐えきれなくなった。ロサンジェルスにくらべると、この街は有機的で、人の体臭に満ち満ちている。

バワリー通りに出ると、路上に、おびただしい空嚢が散乱していた。割れたガラス片が乱反射して、歩道にだけ雪が降っているようだ。五〇セントかそこらで買える葡萄酒の嚢が多かった。安ウィスキーの嚢も混っている。アルコール中毒らしい男たちが、嚢のはみでた紙袋を抱え、陽だまりで眠っている。冬になったらどうするのだろう。いや、他人ごとじゃない、自分も早く暖房つきの部屋を捜さねばならない。その次に、一日も早く職をみつけることだ……。あと二カ月は食べていけるが、それから先、まったく何のあてもなかった。日本へ逃げ帰る旅費もない。いや、それは初めからなかった。東京の地下鉄の工事現場で働いて、片道分の旅費

をつくり、たった五万円相当のドルを持って、アメリカにやって来たのだった。それから三年近く、皿洗い、ウェイター、庭師、ガソリン・スタンド員、倉庫の運搬人、運転手、店員……と、さまざまな職についてきた。だから初めての土地でどうやって生きていけばいいか、おおよその見当はついている。なにも怖れることはない……。

足音が聴こえた。四十歳ぐらいの白人女が歩いてくる。やり過ごそうと立ち止まると、女も立ち止まり、路地を曲ると急いで追ってくる。娼婦ではなさそうだ。髪をひつつめに束ね、化粧もしていない。

「やあ」私は試しに声をかけた。

「何してるの？」

女は、にこりともせず訊いた。喉が破れ、息が洩れているような太い掠れ声だった。

「アパートを搜してるんだよ」

「じゃ、手伝ってあげる」

女はいきなり私に腕組みして、ぐいぐい引っぱりながら歩きだした。どうしても娼婦とは思えない。肉感に媚びようとする気配がなかった。肌も乾いている。眼は薄い鳶色で、偏執的な粘っこさを感じられた。女は通りのアパートを見つけると、かたっぱしから入口のベルを押し、出てきた管理人に空部屋がないかどうか尋ねはじめた。

「あ、そう、ないの。じゃあね、バイー！」

女はさらに次のアパートのベルを押し、べらべら喋りはじめた。

「部屋空いてない？　この人、うちのパーティによく来るの。え、あたし？　あたしはロフトに住んでるの、この人よ、部屋捜してるのは、そうなの、国連に勤めてるの、ええ、国連の人、パーティにもいっぱい来るわよ」

どうも頭がおかしいな、と思いながら、この女が何を求めているのか確かめたい気がした。すぐに分かった。まだ開いていないバーの前で、女は立ち止まり、力まかせに戸口を叩きはじめた。返事はない。「畜生！」と女は罵り、次のバーをきょろきょろ捜しながら歩きだした。アルコール中毒らしい。

「ありがとう、もういいよ、自分で捜すから」

私は腕をふりほどき、路地を曲った。

女は追いかけてきて、蝶々を捕まえようとする猫のしぐさで、右手の拳を突きだし、しきりに宙をひっ搔いてみせた。

「あたしはね、こうして主人を殺したの、ほらー」

中指に、真鍮らしい金具のついた指輪をはめていた。金具の先端が、三角の鋸やじりのように尖っている。女は、私の喉笛に狙いをつけ、

「弟も殺したの、ええ殺したわよー　ほら、こうやってー」

と、襲いかかってきた。私は後ろに跳びのいた。狂っているらしい。尖った指輪の金具が、

また鼻さきを掠めた。殺意は感じないが、決して冗談ではなかった。目が坐り、その指輪で人を殺したことがあると本気で思い込んでいる気配がした。私は薄気味悪くなって走りだした。女は、しきりに宙をひっ掻きながら追いかけてくる。

人混みにまぎれ込み、その流れに運ばれるまま階段を降り、地下鉄に乗った。まだ乾かない精液でべとついているような、臭い、薄汚い地下鉄だった。腋の臭い、黒人や白人たちの体臭、新聞のインクの匂い、昨日だれかが吐いた汚物の臭い……。人々は淋しい家畜のように黙っている。昏かった。どこを走っているのかわからない。人いきれで曇ったガラスをこすり外を見ると、地下の壁がぼうつと仄明るく照らしだされている。コンクリートではなかった。剣きだしの黒い岩の塊りがどこまでも、どこまでも地中の奥へつづいていく。そういえばマンハッタンは、イースト・リヴァーとハドソン川に挟まれた細長い岩の島だというが、これがその岩盤なのか。この岩の塊りが巨大な摩天楼を支えているのか……。地下水が泌みだしているらしく、岩肌は濡れ、黒くつややかに光っている。電車の速度が落ちると、岩盤を抉り、掘り進んでいた機械鑿の痕がくつきり見えてくる。地上に土はあるのだろうか。埋葬のときはどうするのだろうか。墓穴ぐらいの土の厚みはあるのだろうか。いや、火葬するから墓穴もいらぬか……。いつだったか、このニューヨークの地下鉄の複雑に枝わかれた廃線の奥で、二十を超える人骨が見つかったという新聞記事を読んだことがある。禁酒法時代に殺されたマフィアの骨らしかった。この昏い穴の奥に、まだまだ無数の人骨が隠されているのかもしれない。

電車は頭蓋の内側にこもるような響きをたてて、地下の迷路を走りつづけていく。

「なにするの、やめてよ！」

女の金切声が走り、人々がふうつと微笑を洩らした。

人波に押されるまま、私は電車から降り、地表を目ざして階段を昇った。秋の光りが、垂直な体積となり舗道にのしかかっていた。高層ビル群は、たてに割れた鉱物の結晶のようにきらめいていた。

路上で、二人の警官がギリシャあたりからの移民らしい青年を取調べていた。壁に両手をつけて立たせ「こん畜生！」と罵りながら、背後からポケットを探っている。もう一人の警官は数歩さがった位置で、腰の拳銃に手をかけている。青年は奥歯をかみ、若い苦行僧めいた顔でこらえていた。私は内心うろたえながら、さりげなく迂回していった。

緑の、セントラル・パークに着いた。土があつた。四方に高層建築が聳えたち、その長方形の公園は低く地に沈み、一つの巨大な墓穴に見えた。子供らが鳩を追いかけて、遊んでいる。オレンジ色の布を身にまとったクリシュナ教団の若者たちが、頭を丸刈りにして、豚の尻尾ほどの弁髪をたらし、鐘やシンバルを鳴らしながら踊っている。シュリラーム、ジャイラーム、ジャイ、ジャイ、ラーム、ジャイラーム。

木陰では学生らしい男女が、裸足で踊るクリシュナ教徒たちよりも陶然として抱き合っていた。

公園の池で、浮浪者が洗濯をしていた。黄ばんだ下着を絞ると、すぐ近くの、猿山ほどの岩塊の上にひろげて日に乾している。私はなんとなく腰をおろし、あの岩だ、と不意に思った。地下の迷路を抱えこんでいた岩、マンハッタンの高層ビル群を支えている岩盤がここだけ地表に露出しているのだ。これは玄武岩だろうか、安山岩だろうか……。私は、秋の陽射しを孕んでいる温かい岩をさすりながら、なるほど、これはニューヨークの出臍みたいなものだな……と、ひとり微笑した。

イースト・ヴィレッジに住もうと決めた。五日間、マンハッタンをほつつき歩いて、そこが一番気に入った。プエルト・リコ移民の多いスラム街である。煉瓦造りの古い建物がひしめきあい、まわりの高層建築群のなかできわだって低く陥没し、焦茶色の沼のように沈んでいる。街が気に入った。それにプエルト・リコ人に本能的な親しみを感じた。まず皮膚の色がちょうど同じぐらいだし、カリフォルニアで肉体労働をしていた頃、よく出稼ぎのメキシコ人と同じ合っていたから、スペイン語も片言なら話すことができた。同じように髪も黒く縮れており、脚はこちらの方が短いが背丈そのものは、ほぼ同じぐらいだった。この真黒に日焼けした皮をかぶっているかぎり、プエルト・リコ人街にうまく紛れ込んでしまえるだろう。それに黒人もいるし、少数だが白人も住み、中国人の経営するクリーニング屋もある。イタリア人街も、チャイナ・タウンも、ユダヤ人街もさほど遠くはなかった。このスラム街は、どんな民族、どん

な人種でも呑み込んでしまふ多様性や混沌があり、しかも、まっとうな生活の匂いが満ちていた。ここに潜り込んでしまえば、私がどこから来たのか、国籍がどこか、だれひとり気にもかけないだろう。

不動産屋の主人は、痩せた小柄な白人だった。スラム街で商売をやっていくこつなのか、極力、自分が白人であることを目立たせないように気づかっていた。

最初のアパートはひどすぎた。窓のすぐ外に煉瓦壁がぎりたち、古井戸の底のように日が射さない。二軒目のドアを開けると、腐臭がした。新聞紙、壊れた椅子、生ごみの袋が散乱し、浴槽に水が満たされて、死んだ魚が腐りかけた白い腹を上に向けて浮かんでいた。壁には、なにか忌わしい呪符のようなものが貼りつけてあった。星形の魔法陣の上に、DEATH(死)と赤インクで書きつけてある。たぶん、部屋代をためこんで追い出された者が、いやがらせに残していったのだろう。

「ひでえとこだな」と私は笑った。

不動産屋は舌打ちして窓をあけた。向かい側の屋根を猫が走った。

十番通りと、ビット通りが交差する附近のアパートに決めた。部屋代は月八〇ドル。二部屋だった。浴槽はホウロウびきの鋳物で、ガスレンジと冷蔵庫がついているだけだ。寝台も、食卓も、椅子もない。絨毯もない剥きだしの床に、埃だらけの黒い電話機がぼつんと置いてあっ

た。手に取ってみると、接続を切られていた。

契約書に、Jiro Sahara と偽名を書き、署名した。手はべつに震えなかった。

「OK、ミスター・サハラ」

と、不動産屋は握手を求めた。

身分証明書やパスポートを見せろとは言わなかった。もし、それを要求されたら、「あ、ホテルに忘れてきた」と、ごまかして二度と来ないつもりだった。不動産屋は、どこから来たのかさえ尋ねようとしないう。この吹き溜りのスラム街では、身元を訊くのはタブーなのか、あるいは身分証明書を要求すれば客をひとり逃がすことになるかと承知しているのだろう。金さえ払えばいいのだ。

「グッド・ラック、ミスター・サハラ」不動産屋は愛想よく言った。

歩きながら、いったいいくつ身分証明書を持っているか数えてみた。パスポート。カリフォルニア州の運転免許証。国際運転免許証。IDカード。……アメリカの兵役登録証だ。日本人の私が兵役登録するのはおかしい話だが、カリフォルニアでの滞在期間が半年過ぎたとき、移民局から命令されたのだ。拒否すればヴィザの延期ができない。それに犯罪でも犯さないかぎり、まず徴兵される心配のないEとかDとかいったクラスらしいから、アメリカに忠節を誓って、署名した。笑いごとじゃない。もしも、今この国に不法滞在していることが露見したら、手錠をはめられ、留置場にぶち込まれるだろう。そして、国外追放されるか、日本へ強制送還

されるか、あるいは、刑務所か、軍隊へ行かされることになる。

もう一つ、偽名の身分証明書を持っている。ソシアル・セキュリティー・カードといって、納税者番号のついたカリフォルニア州の証明書で、これがなければ絶対に職につくことができないのだ。

このカードに使っている Jay Hofshi という偽名に、私は愛着があった。Jay というのは、アメリカ人がつけた綽名だった。ブルージェイという真青な鳥がいる。青カケスの一種だが、鴉ぐらいの大きさと、鴉そのものを南方の海の色に染めかえたような美しい鳥だ。カリフォルニアの青空とよく似合っていた。私はその鳥が好きだった。二メートルぐらいの距離まで近づいてきて、人を小馬鹿にしたように眺めている。その鳥を見るたびにうっとりしていたせいか、いつのまにか私はブルージェイと呼ばれ、そのうちに Jay になった。Hofshi の方は、ヘブライ語で「自由なる男」という意味らしい。イスラエル出身のユダヤ人に聞いたのだが、別のユダヤ人は、そんなヘブライ語など知らないという。

偽名で暮すようになったのは、一年ほど前からだった。観光ヴィザで入国した者は、アメリカで働くことを禁じられているのだが、文無しの私は、むろん働かざるをえなかった。不法労働をしていたのだ。そのことを移民局に密告されてしまった。女が原因だった。

朝、麦藁帽をかぶって仕事に出かけようとしているとき、移民局の係官がドアを叩いた。私は空惚けて、しらを切り通した。